

D 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

- マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。
- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
 - 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
 - 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきれずに取り除いてください。

マーク例

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ① | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| | 0 | 0 | ● | 0 | 0 |

(3と解答する場合)

一九三七年頃に書かれた左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

これは今から四十八年前の実験で、うそは言わぬつもりだが、余り古い話だから自分でも少し心もとない。今は単にこの種類のできごとでも、なるべく話されたままに記録しておけば、役に立つという一例として書いてみるのである。人が物を信じ得る範囲は、今よりもかつてはずっと広かったということは、こういう事実を積み重ねて、始めて客観的に明らかになって来るかと思う。

日は忘れたが、ある春の日の午前十一時前後、下総北相馬郡布川という町の、高台の東南麓にあった兄の家の庭で、当時十四歳であった自分は、一人で土いじりをしていた。岡に登って行こうとする急な細路のすぐ下が、この家の庭園の一部になっていて、土蔵の前の二十坪ばかりの平地のまん中に、何か二三本の木があつて、その下に小さな石の祠が南を向いて立っていた。この家の持主の先々代の、非常に長命をした老母の霊を祀っているように聞いていた。当時なかなかいたずらであつた自分は、その前に叱る人のおらぬ時を測つて、そつとその祠の石の戸を開いて見たことがある。中には幣も鏡もなく、単に中央を彫り窪めて、径五寸ばかりの石の球が箆め込んであつた。不思議でたまらなかつたが、悪いことをしたと思うから誰にも理由を尋ねてみる事ができない。ただ人々がおばあさんの噂をしている際に、いつも最も深い注意を払っていただけであつたが、そのうちに少しずつ判つて来た事は、どういうわけがあつたかその年寄は、始終蠟石のまん丸な球を持っていた。床に就いてからもこの大きな重いものを、撫でさすり抱え温めていたということである。それに何等かの因縁話が添(1)わつて、死んでからこの丸石を祠にまつり込めることになつたものと想像することはできたが、それ以上を聴く機会はついに来なかつた。

今から考えてみると、ただこれだけの事でも、暗々裡に少年の心に、強い感動を与えていたものらしい。はつきりとはせぬが次の事件は、それから半月か三週間のうちに起こつたかと思われるからである。その日は私は丸い石の球のことは、少しも考えてはいなかつた。ただ退屈をまぎらすために、ちょうどその祠の前のあたりの土

を、小さな手鍬のようなもので、少しづつ掘りかえしていたのであった。ところがもの二三寸も掘ったかと思う所から、不意にきらきらと光るものが出て来た。よく見るとそれは皆寛永通宝の、裏に文の字を刻したやや大ぶりの孔あき銭であつた。出たのはせいぜい七八個で、その頃はまだ盛んに通用していた際だから、珍しいことも何もないのだが、土中から出たということ以外に、それが耳白(注2)のわざわざ磨いたかと思うほどの美しい錢ばかりであつたために、私は何ともいい現わせないような妙な氣持になつた。

これも付加条件であつたかと思うのは、私は当時やたらに雑書を読み、土中から金銀や古銭の、ざくざくと出たという江戸時代の事実を知つていて、そのたびに心を動かした記憶がたしかにある。それから今一つは、土工や建築に伴なう儀式に、銭が用いられる風習のあることを少しも知らなかつた。この銭はあるいは土蔵の普請ふしんの時に埋めたものが、石の祠を立てる際に土を動かして上の方へ出たか、又は祠そのものの祭のためにも、何かそういう秘法が行なわれたかも知れぬと、年をとつてからなら考える所だが、その時は全然そういう想像は浮かばなかつた。そうして暫しばらくはただ茫然ぼうぜんとした氣持になつたのである。幻覺はちやうどこの事件の直後に起こつた。どうしてそうしたかは今でも判らないが、私はこの時しゃがんだままで、首をねじ向けて青空のまん中より少し東へ下つたあたりを見た。今でもあざやかに覚えているが、実に澄みきつた青い空であつて、日輪のありどころよりは十五度も離れたところに、点々に数十の星の星を見たのである。その星の有形なども、こうであつたといふことは私にはできるが、それがのちのちの空想の影響を受けていないとは断言しえない。ただ間違ひのないことは白昼に星を見たことで、(その際に鴨ひよどりが高い所を啼いて通つたことも覚えている)それを余りに神秘に思つた結果、かえつて数日の間何人にもその実験を語ろうとしなかつた。⁽³⁾そうして自分だけで心の中に、星は何かの機会さえあれば、白昼でも見えるものと考えていた。後日その事をぼつぼつと、家にいた医者いしやの書生たちに話してみると、彼らは皆大笑いをして承認してくれない。いったいどんな星が見えると思うのかと言つて、初歩の天文学の本などを出して来て見せるので、こちらも次第にあやふやになり、又笑われても致し方がないような氣にもなつたが、それでも最初の印象があまりに鮮明であつたためか、東京の学校に入つてからも、何度かこの見聞

を語ろうとして、君は詩人だよなどと、友だちにひやかされたことがあった。

話はこれきりだが今でも私はおりおり考える。もし私ぐらいしか天体の知識をもたぬ人ばかりが、あの時私の兄の家にいたなら結果はどうであつたらうか。少年の真剣は顔つきからでもすぐにわかる。不思議は世の中になんといはいえぬと、考えただけでもこれをまに受けて、かつて茨城県の一隅に日中の星が見えたということが、語り伝えられぬとも限らぬのである。その上に多くの奇瑞には、⁽⁴⁾もう少し共通の誘因があつた。黙つて私が石の祠の戸を開き、又は土中の光る物を拾い上げて、独りで感動したような場合ばかりではなかつたのである。信州では千国の源長寺が廃寺になつた際に、村に日頃から馬鹿者扱いにされていた一人の少年が、八丁のはぼという崖の端を遠く眺めて、「あれ羅漢さまが揃つて泣いている」といった。それを村の衆は一人も見ることができなかつたにもかかわらず、さてはお寺から外へ預けられる諸仏像が、ここへ出て悲歎したまうかと解して、深い感動を受けて今に語り伝えている。あるいは又松尾の部落の山畑に、⁽⁵⁾増と二人で畑打をしていた一老翁は、不意に前方のヒシ（崖）の上に、見事なお曼陀羅の懸かつたのを見て、「やれ有難や松方尾の薬師」と叫んだ。その一言で増は何物も見なかつたのだけれども、たちまちこの崖の端に今ある薬師堂が建立せられることになつた。この二つの実例の前の方は、あらかじめ人心の動揺があつて、不思議の信ぜられる素地を作つていたともみられるが、後者に至つては中心人物の私なき実験談、それも至つて端的に又簡単なものが、ついに一般の確認を受けたのである。その根柢をなしたる社会的条件は、甚だしく、幽玄なものであつたと言わなければならない。

（柳田國男「幻覚の実験」による）

（注） 1 幣——神前に供える切り紙。

2 耳白——ここでは寛永通宝錢を指す。

問

(A) ~~~~~線部(あ)~(う)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。

- | | | |
|-----|-------|---------|
| (あ) | 心もとない | 1 不安である |
| | | 2 勇気が無い |
| | | 3 待ち遠しい |
| | | 4 難しい |
| | | 5 じれったい |
| (い) | なかなか | 1 意外に |
| | | 2 中途半端に |
| | | 3 ひとなみに |
| | | 4 ある程度 |
| | | 5 かなり |

- (う) 暗々裡に
- | |
|-----------|
| 1 徐々に |
| 2 ひそかに |
| 3 おそらくは |
| 4 なんとなく |
| 5 とりとめもなく |

(B) ~~~~~線部(1)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 祠が実はおばあさんの墓なのだろうということ。
- 2 丸石がおばあさんの霊と何かしら関係があるのだろうということ。
- 3 人々がおばあさんの死後を注意深く見守っている証なのだろうということ。
- 4 何か悪いことをしたおばあさんを祠に封じ込めておくためなのだろうということ。
- 5 丸石へのおばあさんの愛着が死後も持続するほどに強いものだったのだろうということ。

(C) ~~~~~線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 宝の美しさに茫然としつつも、これを掘り当ててしまったのは、単なる偶然ではないのでは、と思いいたつて驚く気持ち。

2 苦勞もせずに宝を掘り当てるほど強運なのだから、自分の人生はきつと幸運に満ちたものではないかとひそかに喜ぶ気持ち。

3 丸石から受けた強い印象が、土中から宝を掘り当てようとする無意識の願望へとすり替わっていたことに気がついて戸惑う気持ち。

4 土を掘り返す作業は、人々が噂する因縁話を解き明かしていくためのもとも大事な作業であると気がついて、手応えを得た気持ち。

5 祠には丸石だけではなく、銭にまつわる因縁話もあったのではないかと想像し、また悪いことをしてしまったと思う、やりきれない気持ち。

(D) ——— 線部(3)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 茫然とした気持ちがいばらく続くと、現実と区別することができないような幻覚を見ることがあるということ。

2 詩を解するような心持ちを持つならば、昼の空にもまた星を見分けたりすることが時々はあるはずだということ。

3 神秘を求める気持ちが思いがけずに満たされると、ついに昼間であっても星を見分ける能力が授けられるということ。

4 まるで導かれたかのように宝を掘り当ててしまう不思議な瞬間には、昼に見えないはずの星もまた見えるものだという事。

5 美しい銭の磨いたような輝きを思いがけずに目にするならば、それが白昼の星となって再現されることがあるということ。

(E) ——— 線部(4)について。「共通の誘因」として筆者が考えているものを、本文中から抜き出し、五字で記せ。

(F) ——— 線部(5)について。「深い感動を受け」た理由として筆者が考える最も適当なものを、次のうちから一つ

選び、番号で答えよ。

1 人々が仏像を他所へ預けたくないと思っていたところ、まるでその意をくんだような不思議が起こったから。

2 少年がたまたまもらった馬鹿げた言葉を口実とすれば、それが仏像を村に止めておく妙案になると人々が理解したから。

3 少年が簡単な描写で仏像の悲歎する様を巧みに伝えたことが、普段少年を馬鹿者扱いしている人々にはとても不思議なことであったから。

4 ありもしない出来事が起こったと言って少年が愚かにもついた嘘を、人々が哀れに思っ、本当に起こった話として信じていくことにしたから。

5 不思議が起こって人々が不安を感じているようなときには、少年がもつ愚かさがかえって悲しみを覚えさせるものとなることを、人々が理解したから。

(G) ——— 線部(6)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 物語というものは、中心人物に焦点をあてず、物語の展開を整えて簡単にするならば、最終的には人々に受け入れられることがある。

2 体験者の私心が混じらない明確なイメージは、たとえそれが不思議な出来事をめぐるものであっても、人々に事実として受け入れられることがある。

3 壻は老人がもうろくしたのではと思いつつも、それが人々に知られるのを怖れて、出来事についてあえて断片的な事柄しか伝えなかつたところ、それが功を奏した。

4 崖の上に現れた幽霊を老人は薬師如来の具現と見誤つたのであつたが、人々は老人の素朴で実直な人格を尊いとし、また幽霊に対する不安を鎮めるために薬師堂を建てた。

5 薬師像が崖の上に置かれているのを老人が最初に発見したが、壻が発見の経緯を私心なく上手に人々に伝

えた結果、それが認められ、記念として像を奉納するためのお堂がつくられた。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

阪神・淡路大震災の前の私にとっては、ボランティアとはカンボジアなりアフリカのどこかに出かけていく人たちであった。

ずいぶん前だが、ある財団の助成審査委員をしていて、千葉県上総^{かずさ}地方に伝わる「上総掘り」という井戸の掘り方をフィリピンとタンザニアに伝授するボランティアの報告会に出た。ビデオを見れば、竹のヒゴをぐるぐる巻いたものを使い、竹の弾力を原動力にして井戸を掘るのである。最新の技術でなしに、こういう「草の根」の技術を伝えること自体に意義があるということであった。確かに感動的な場面であった。

日本中に、僧行基が掘った池、だれそれが伝授したおまんじゅう作りの方法などという言い伝えが残っている。上総掘りも、いずれそういう伝承としてその地に残るかもしれない。

しかし、これが印象に残ったということは、私にとってボランティアというものが、やはり遠いものであったことを示していると思う。私は本業のみにいそ^(あ)む^(あ)大方の人と同じであった。決してボランティアを理解していただけでなく、深く考えたことさえなかった。

ところが阪神・淡路大震災である。私が聞いた話では、奈良女子大学では外国からの留学生が早速飛び出していつて、はっと気づいた日本人学生が二、三日後にあとに続いたということである。留学生にはボランティアは当たり前のことであった。

私は当時、災害の中心にある大学医学部精神科の教授だった。⁽¹⁾気がついてみると、私はボランティアたちの渦の中にいた。精神科医が休暇をとってやってきた。ありとあらゆる層から来た人たちが走り回っていた。私自身も、だれからの指図も受けずに、自分でそのときどきに最善と思うことをしていた。人々の観察と自己観察とから、私はボランティアというものが何かを考えてみる機会を得た。

私は私なりに理詰めなところがあるから、ボランティアの倫理的根拠というものをたどってみた。私は孟子^(注1)の

「惻隱の情」に行き着いた。「忍びざるのこころ」とも言われるこの情は、孟子の人間性善説の基礎になっている。井戸に落ちようとしている子供を見たときには、だれもがはつとして駆け寄って助けようとする。この、反省意識や理性的判断以前の心の動きに、孟子は人間の本性は善である証拠の一つを見た。

私にはこういう覚えがある。例えば、乗り物の中で、「この中に医師がいないか」という放送がある。⁽²⁾そういうときに感じる何かである。ではすつと立てるかというところ、そうではない。専門が違う、だれかが立つてくれるだろう、いまから急ぎの用がある、などなど、こういう言い訳はつねにわいてくる。結局、立たないままでいる口実は必ずあるので、その口実を無視するしかないかが決め手になる。もう一つは、恥をかかないかどうかである。いざ立つて役に立たなかつたり、間違つたことをしたら恥ずかしいということである。小学校のときに手を挙げて当てられたとたんに答えを忘れてしまった恥ずかしさは、生涯抜けないものだ。

ところで、私が思い切つて立つと、わらわらと立つ人が出てくる。仲間がいる心強さがあるのだろう。やはり、最初に立つのは、学会で最初に質問するのと同じ、二番手とは違う、大変なエネルギーがいる。⁽¹⁾「ザシするのに忍びない心」というものは、確かにだれにでもあるのだろうけれども、それが発動するまでには葛藤があるということだ。いじめを見過ごすかどうかになると、その葛藤は大変だ。震災の場合には、返り討ちに遭うということはないし、一人だけということはないけれども、やはり、布団をかぶつて寝てしまいか、立つて走り回るかを分ける最初の一瞬というものがある。どちらになるかは最初は紙一重であると思う。いったんどちらかに踏み切れば、どんどんそちらのほうに行く。どうも、そういうふうな人間の心はできているらしい。

しかし、キリスト教の伝統からボランテニアは生まれたのではないかと言われそうである。キリスト教についてはにわか勉強をするほかない。

フランス語でもスペイン語でもイタリア語でも、「良心」という言葉と「意識」という言葉とは同じである。日本人はちよつと当惑する。

これはラテン語の *conscientia* (コンスキエンティア) にさかのぼる。それが各国語に語形変化しただけのこと

である。聖ヒエロニムスが聖書をラテン語に訳したとき、ギリシャ語の *syneidesis* (シユネイデーシス) の訳に使ったのである。このギリシャ語は、もともとは「共に知ること」という言葉で、「他人(の痛みなど)を知ること」を指し、次に自己認識をも指した。キリスト教に入つて初めて超越的なものとの関係の意味になつて、「神に知られるもの」という意味で「良心」と「意識」とが同じ言葉で表されるようになった。「良心」と「自己認識」はひとつである。だから、「無意識」が自分の行動を決定しているというフロイト派精神分析の考えに、西欧の人が大変な抵抗を覚えるのだと私は思う。「自分が知らない自分の内なるもの、すなわち神に自分が責任をもつてみせられないもの」に動かされているなんて、とんでもないことである。それは内なる「」ではないか。

ドイツ語の意識は「ゲヴィッセン」*Gewissen* とつて「知っていることの総体」である。ルターが聖書をドイツ語に訳すときに「シユネイデーシス」につけた訳である。意味からは「意識」に近いようであるけれども「良心」を指す。「自分が知っていることの総体」は、神との関係において初めて「良心」の意味をもつことができる。我々なら、だれも見えていなくても「天知る、地知る、己知る」ということが一番近そうである。

なるほど、英語では「良心」*conscience* と「意識」*consciousness* とを区別するけれども、前者がフランス語同様、元来は双方を指していたのであり、後者は学術用語として十七世紀に生まれた、ずっと遅い言葉である。「良心」と「意識」の分離はともプロテスタントイイズムの成立と深い関係がありそうである。

「意識」と「良心」とはいまでもフランスやスペインやイタリアでは、強いて区別するときには「心理的」「道徳的」と形容詞をつける。そういう近さは、日本語からは見えてこない。「意識」は漢語であるけれども、大乘仏典の翻訳によく使われた言葉である。

日本語の「良心」という言葉は、元来は『孟子』に出てくる言葉である。キリスト教は罪深い存在とするから、孟子の性善説とは本来非常に違うものであるけれども、井上哲次郎という、明治初期にたくさんの方学用語を日本語に訳した人が、ドイツ語の *Gewissen* を訳すときに『孟子』から引つ張つてきたという。聖書の日本語訳のほうが先かもしれないが、私にはそこまで調べられない。

このように、西欧の「良心」は神と向かい合う自己意識である。神の姿が遠くなった近代西欧において、意識は「自己意識」を指すものになった。ここで、近代哲学においてもっともやっかいな問題の一つ、「他者問題」すなわち「他者認識が可能か」という問題が出てきた。「神のごとき自己が認識する自己等価物」という意味では他者は認識できないと私は思う。ベルギーのルーヴァン大学を中心とする新トマス主義(注2)のカトリック哲学は、「自己」を「他者からの贈り物」とするそうだが、この考えは、私にはどこか真実さが感じられる。

逆にキリスト教以前にさかのぼれば、コンスキエンティアもシュネイデーシスも「他人（の痛み）を知ること」であった。オクスフォード・ギリシャ語・英語大辞典の最初の例は産婆が（産婦の）痛みを共に感じることに関するものである。だから、たぶん、そんなにコウショウ(注1)なことでもなくてよいのだろう。私は、人がけがをした瞬間、「あ、痛っ」と叫んでしまうことが何度かあった。こういうのもシュネイデーシスなのだろう。だとすれば、神を介する以前の古代ギリシャ・ローマの倫理的基礎は惻隱の情とはそんなに遠くない。

（中井久夫『いじめの政治学』による）

（注） 1 孟子（もうし）——中国の思想家。性善説を唱えた（前三七二頃～前二八九頃）。

2 新トマス主義——一九世紀後半におこった、神学者トマス・アクイナスの神学・哲学を復活させる思想・運動。

問

- (A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書かいしょで記すこと)
- (B) 線部(あ)・(い)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。

(あ) いそしむ

- | | |
|---|------|
| 1 | はげむ |
| 2 | 通じる |
| 3 | 徹する |
| 4 | こだわる |
| 5 | 興じる |

(い) 天知る、地知る、已知る

- | | |
|---|-------------------|
| 1 | すべての世界を自分は知っている |
| 2 | 善行は必ず多くの人に認められる |
| 3 | 自分のことは自分がすべて知っている |
| 4 | 善行は必ず自分のためになる |
| 5 | 隠し事は必ず露見するものである |

(c) 線部(1)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 いつものまにか、ボランティア活動の中心的なメンバーとなっていたことに気づいた。
- 2 ボランティアというものは、自分の身近な必要に迫られてするものであることを認識した。
- 3 ボランティアをするには、その活動に参加するきっかけを作っていくことが重要だと痛感した。
- 4 その時々になすべきことをしていたら、遠いと思っていたボランティア活動に取り組んでいた。
- 5 周りの様々な人たちと一緒に取り組んでいたら、ボランティアの大きな集団ができていた。

(D) 線部(2)について。ここでいう「何か」の内容として、最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 先頭に立って何かをしたいという強い意志
- 2 神と向かい合おうとする自己意識
- 3 様々な言い訳をしなくなる衝動
- 4 理性に先立つ、人を助けたいと思う心の動き
- 5 間違えたら恥ずかしいと思う気持ち

(E) 空欄□にはどんな言葉を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 欲望 2 罪 3 神 4 無意識 5 悪魔

(F) 本文の「良心」や「意識」という言葉に関する説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 日本語の「良心」は、ドイツ語の「ゲヴィッセン」を翻訳したものであり、ギリシャ語の「共に知ること」の意味を踏まえていた。

2 フランス語で、「良心」という意味を明確に示す場合には「道徳的」を意味する形容詞をつける。

3 日本語における「良心」は、もともと『孟子』に出てくる言葉であり、「惻隠の情」の基礎になっている。

4 英語では元来一つの語が「良心」と「意識」の二つの意味を持っていたが、後に「意識」という意味のみ使われるようになった。

5 日本語の「良心」と「意識」を表現する語は共に仏典に由来するが、「意識」の方が普及は早かった。

(G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ キリスト教の伝統においては、神に向かい合うことで、「自己認識」は「良心」という意味を持つようになった。

ロ ボランティアをすることで、隣人愛のような「他者からの贈り物」によって自分が生かされていることに気づく。

ハ キリスト教における「良心」は、古代ギリシャ・ローマの倫理的基礎と本質的には違いはない。

ニ キリスト教を学ぶことによってはじめて、ボランティア精神を習得することができる。

ホ 必要な時にすぐに助けを申し出られないことがあるのは、性善説が成り立たない証拠である。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

昔、空也上人、山の中におはしけるが、常には、「あなものの騒がしや」とのたまひければ、あまたありける弟子たちも、慎みてぞ侍りける。度々かくありて、ある時、かき消つやうに失せ給ひにけり。心の及ぶほど尋ねけれども、さらにえ会ふこともなくて、月ごろになりぬ。さてしもあるべきならねば、みな思ひ思ひに散りにけり。

かかるほどに、ある弟子、なすべきことありて、市に出でて侍りければ、あやしの薦引き回したる中に、人ある気色して、前にこやうなるものさし出だして、食ひ物の端々受け集めて置きたるありけり。「いかすぢの人ならむ」と、さすがゆかしくて、さし寄りて見たれば、行方なくなしてしわが師にておはしける。

「あなあさまし。『もの騒がしき』とのたまはせし上に、かきくらし給ひてし後は、ふつに世の中にまじらひていまそかるらむとは思はざりつるを」と言ひければ、「もとの住処のもの騒がしかりしが、このほどはいみじくのかにて、思ひしよりも心も澄みまさりてなむ侍るなる。そこたちを育み聞こえむとて、とかく思ひめぐらし心の内のもの騒がしき、ただおしはかり給ふべし。この市の中は、かやうにてあやしの物さし出だして待ち侍れば、食ひ物おのづから出で来て、さらにともしきことなし。心散るかたなくて、一筋にいみじく侍り。また、頭に雪をいただきて、世の中を走るたぐひあり。また、目の前に偽りを構へて、くやしかるべき後の世を忘れたる人あり。これらを見るに、悲しみの涙かきつくすべきかたなし。観念たよりあり。心静かなり。いみじかりける所なり」とぞ、侍りける。弟子も涙に沈み、聞く人もさくりもよよと泣きけるとなむ。まことにあまたの人を育まむとたしなみ給ひけむ、「さこそは」と思ひやられ侍り。

〔「閑居の友」による〕

(注) 1 空也——平安時代の僧。浄土教の先駆者。

2 山——比叡山延暦寺。

3 薦——むしろ。

4 世の中を走る——世俗のことにあくせくする。

5 観念——仏や浄土を思いながら修行すること。 6 さくりもよよと——しゃくりあげて。

問

- (A) 本文中から、年老いているさまをたとえた表現を探し出し、初めの三字を記せ。ただし、句読点は含まない。
- (B) ——線部(1)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 まったく 2 繰り返し 3 たまたま 4 いっそう 5 容易に
- (C) ——線部(2)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 空也上人を探し続けてもいられないので 2 空也上人に頼ってばかりではよくないので
- 3 空也上人が戻って来るとは期待できないので 4 空也上人は生きていないのかもしれないので
- 5 空也上人とどこかで会わないとも限らないので
- (D) ——線部(3)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 不思議な 2 みずぼらしい 3 ありふれた 4 見慣れない 5 きれいな
- (E) ——線部(4)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 変に思っつ 2 うれしくて 3 尊く感じて 4 同情して 5 心ひかれて
- (F) ——線部(5)の現代語訳を八字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。
- (G) ——線部(6)について。弟子はなぜこのように言ったのか。その理由の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 空也上人が騒がしいことをいつも嫌っていたから。
- 2 空也上人がはなはだ貧しい暮らしをしていたから。
- 3 空也上人が静かに仏道修行に打ち込んでいたから。

- 4 空也上人が弟子に人々との交際を禁じていたから。
5 空也上人がもつと遠くに行つたと思つていたから。

(H) —— 線部(7)の意味として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 後悔されるに違いない
2 恨まれるに違いない
3 輕蔑されるに違いない
4 絶望されるに違いない
5 妬まれるに違いない

(I) —— 線部(8)とはどういう場所か。その説明として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 喧噪けんそうから遠く離れた静かな場所。
2 修行するのにとつても適した場所。
3 欲望よぼうに囚とらわれる人のいない場所。
4 悲しみを感ぜないで暮らせる場所。
5 多くの人を救ふことのできる場所。

(J) —— 線部(9)の解釈として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 かなり愚かな行爲だつたかもしれない
2 とても感動し喜びに浸つたのである
3 ひどく反省して悔い改めたに違いない
4 本當にりつぱなふるまいであつた
5 たいそう心をわずらわされたらう

(K) —— 線部(a)と(d)の文法的説明として最も適當なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

- 1 動詞の活用語尾
2 形容動詞の活用語尾
3 副詞の一部
4 完了の助動詞
5 断定の助動詞
6 格助詞
7 接続助詞

【以下余白】

